

「貧困」とは何か？

太 田 歩

「貧困」という言葉を聞いて、あなたは何を想像しますか？大学生時代の私なら迷わず発展途上国で暮らす人々を思い浮かべたでしょう。

大学生時代に出会った国際NGOハピタット・フォー・ヒューマニティを通じ、発展途上国での住居建築活動に参加したことが、「貧困」について考える最初のきっかけとなった。貧困ゆえに日々の暮らしがままならず、1日中働かされる子どもたちや、廃棄物で建てた家に住む人、学校に行けずに育ったために読み書きができない人など、多くの人々と出会った。そこで目の当たりにした貧困から受けた大きな衝撃が、青年海外協力隊員、国際NGO職員と、国際協力に携わる道へと私を導いてきた。

青年海外協力隊員として活動をしたのは、中米の最貧国と言われるニカラグア共和国。最貧国という言葉通り、ほとんどの国民が貧しい暮らしをしている国である。ほんの一部の裕福な人たちが富を独占し、その他の多くの人が無職であり、仕事があったとしても超低賃金。もちろん私が一緒に仕事をしていた同僚も決して裕福ではなく、一緒に遊んでいた友達の多くも貧しかった。

物質的に恵まれた先進国から見ると、彼らの生活はとても質素で、容易に各国の援助対象ともなるだろう。しかし、先進国に暮らす人々の価値観で彼らの生活を「貧困」と決めつけていいのだろうか。事実彼らは非常に貧しいが、「経済的な」貧困は彼らのもつ一面にすぎない。互いに温かい手を差し伸べあいながら、人生を充分に楽しんで生きる彼らを、「貧困」という一言で片づけてしまうのはあまりにも一方的ではないだろうか。もちろん私が実際に行った援助活動の中でも、先進国で培われた技術や経験が大きな役割を果たした。しかし、私が彼らに伝えることが出来た技術や経験以上に、彼らから多くの事を教えてもらった。限られた環境で生き抜くすべ、与えられた状況を受け止める力、互いに支えあうことの大切さ、家族を愛すること、日々の糧に感謝することなど、挙げだせばきりが無いほどの学びを彼らに与えてもらった。これらは、日本での生活では学ぶことが出来なかった点であり、このように少し視点を変えてみれば、先進国に暮らす人々がもつ貧しい面も見えてくるのではないだろうか。生きる力においては、私たちは確実に発展途上国にみえてしまう。

支援する立場になる機会の多い私たちが決して忘れてはならないことは、人間はみな「わかちあう」存在であるということ。片側の人が一方向的に「分け与える」のではなく、人は常に互いにわかちあいながら生きている。分かち合うものが目に見えないと、互いに分かち合っているという事実を忘れがちである。しかしその事実を目を向けることによって、いかに私たちが独善的な考えを持ちやすいかを再認識することもできるだろう。

(ハピタットジャパンスタッフ)